

「NAB Show 2022」が3年ぶりにリアルでの開催

神谷 直亮

「Create 創作」「Connect 配信」「Capitalize 収益化」の3Cをテーマに掲げた「NAB Show 2022」が4月23日から27日までラスベガス・コンベンション・センター（LVCC）で開催された。2020年、2021年はパンデミックのため中止となり、3年ぶりのリアルでの開催となった。主催した全米放送事業者協会（National Association of Broadcasters）によれば、出展者は900社・団体を超えてこの内の160は初出展者であったという。参加登録者数は、52,468人（内海外からの参加者は、155か国から11,542人）に達した。

アメリカのジャーナリスト仲間や実際に参加した日本の関係者などから入手した情報によれば、今回のコンベンションの特色は、テレビ・ラジオの放送関係者だけでなくストリーミングやモバイルビデオ配信を含めた幅広い電子メディアの関係者向けにも企画されていたという。創作面では、リモート制作、クラウド、バーチャルプロダクションからドローンによる撮影にまで及び、配信面では、ATSC3.0が主体であったが、5Gやサイバーセキュリティも取り上げられた。収益化の観点では投資効率はもちろんのこと、新しい収益性を求めて普及を目指すメタバースの動向にも注目している。会場の主な配置を見てみると「Create」はセントラルホール、「Connect」は新設されたウエストホール、「Capitalize」はノースホールに割り当てられている。

まず、仕事の関係で衛星通信・衛星放送関連の出展者を探してみたらインテルサット、ユーテルサット、Hispasat、エコスター、SESの5社の名前が挙がった。

アメリカのバージニア州に活動の本拠を構えるインテルサット社は、新設されたウエストホールで同社の37機の衛星によ

るグローバルなビデオ配信ネットワークを紹介し、「衛星メディアネットワークで収益化を図れ」とNABのテーマに則り来場者にアピールした。特色としては、クラウド化の潮流を強調しコンテンツをコントロールするための「Cloud-based Management Tool」を前面に押し出している。さらに衛星通信用の車載局、可搬局を紹介して「遠隔地からのニュース素材の収集にもっと衛星を活用しと欲しい」と訴えた。

「Global Connectivity, Local Delivery」をモットーに掲げたユーテルサット社は、グローバルに展開する36機の衛星のポスターをブースに掲げて出展した。アメリカでのコンベンションということで、今回特に北米と南米のビジネスに焦点を当てていたという。南米でのビジネスの一例として取り上げられたのが、Telespazio社と共同で提供するペルー向けのブロードバンド・インターネット・サービスである。使用する衛星は、「Eutelsat 117 West B」で、主にアマゾンに近い過疎地域向けのサービスを実現している。

スペインのマドリッドに本社を置く Hispasat 社もウエストホールに出展して、北米・中南米向け衛星放送、ブロードバンドサービスを売り込んだ。ホットな話題は、Telefonica Group から買い取った Media Networks Latin America (MNLA) 社によるビジネス展開であった。MNLA 社の買収により Hispasat 社は、同社の西経61度の Hispasat 衛星で、ブラジル、ボリビア、コロンビア、エクアドルなどの国民に対する直接サービスが実現することになった。つまり、単なる衛星というインフラの提供事業者からユーザーを対象にするサービス事業者になることができたという。

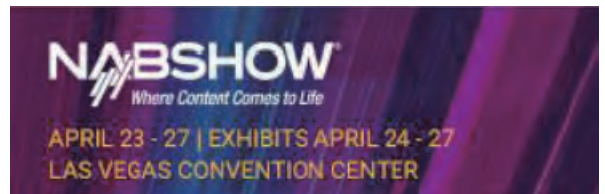


写真1 3年ぶりのリアル開催となった「NAB SHOW 2022」は、52,468人の参加者で賑わった。

米コロラド州イングルウッドに本社を構えるエコスター社は、現在運用中の9機のKu、Ka、Sバンド衛星をウエストホールで売り込んだ。ブースでの話題は、今年中に打ち上げの予定であった「Jupiter-3/Echostar-24」衛星に集中した。残念ながら打ち上げは2023年第一四半期まで遅れるとのことであった。

ルクセンブルグに本社を構えるSES社は、アメリカの子会社のSES Americaと共同でLVCCに隣接するルネッサンス・ホテルにHospitality Suitesを設けて対応した。理由はよくわからないが、まだインテルサット社との間でCバンドをめぐる係争が続いており、あえてウエストホールでの展示を控えたようだ。SES社のホットな話題は、最新の中軌道周回衛星「mPower」の打ち上げだ。SpaceX社の「Falcon9」ロケットで2022年第二四半期に打ち上げると予告していたが「第三四半期にずれ込みそうだ」という。今や興味の対象は、「Falcon9」ロケットで1回に3機投入できるのか2機にとどまるのかである。

衛星通信事業者ではないが、ユーテルサット社、ナイルサット社、テレノール・サテライト社などを顧客にしているAppear社（本社：Oslo Norway）が、アメリカの放送事業者やコンテンツ制作会社を視野に入れて「NAB Show 2022」に初出展を果たした。目玉商品は、「NEO20」「X Platform」「XC Platform」である。「NEO20」は、「NEO10」の最新版でHEVCとAVCの同時トランスコーディングがプラグ&



写真2 インテルサット社は、37機の衛星によるグローバルなビデオ配信ネットワークを紹介した。(出典: intelsat.com)

プレイで可能という。「X Platform」は、「ビデオのコントリビューション・ディストリビューションを高速で実現するプラットフォームで、特にスポーツやeスポーツ向けに適している」と売り込んだ。

次いで、日本を代表するソニー、パナソニック、キャノン、池上通信機、アストロデザイン、リーダー電子が最新の製品やシステムをセントラルホールで紹介して存在感をアピールした。

ソニーは、デジタルシネマカメラ「VENICE 2」、IPライブプロダクションシステム、クラウド中継システム「M2 Live」、Airpeak S1」と名付けたドローンなど多種多様な製品とシステムを出展して相変わらず人気を得ていた。中でも特筆すべきは、新開発の8.6Kイメージセンサーを搭載したCineAltaカメラ「VENICE 2 8K」が、栄えある「NAB Show Product of the Year 2022」シネマカメラ部門賞に輝いた。

「Connecting It All Together」をテーマに掲げたパナソニックは、ブースに「Connected Solutions」「Connected Cloud」「Immersive Live」「Smart Studio」「Remote Production」の5つのエリアを設けて来場者を迎えた。具体的には、テーマに則りコネクテッドコミュニケーションをサポートするリモートカメラ、ロボティックカメラシステム、スマートスタジオ、IT/IPプラットフォーム「KAiROS」など幅の広いラインナップが話題となった。キャノンは、キャノンUSAが中心と

なってセントラルホールで対応に当たり、EF Cinema レンズ「CN-E20-50mm T2.4LF/FP」と「CN-E45-135mm T2.4LF/FP」を目玉にして出展した。前者は、ワイドアングルズームレンズで後者はテレフォトズームレンズである。同社によれば、「これら2種を加えることで多様なプロダクションワークフローを効率よくサポートできるようになる」という。カメラとモニターに関しては、「EOS R5 C」と「DP-V1830」を前面に押し出していた。「EOS R5 C」は、フルフレーム8K CMOSセンサーを搭載したミラーレスシネマカメラで、今回栄えあるシネマカメラ部門の「NAB Show Product of the Year 2022」に輝いている。「DP-V1830」は、18.4インチ4K/HDR Professional Monitorで、1月に発売したばかりという。池上通信機は、放送業界の多様なニーズに合わせ、得意とするUNICAM XE 4K HDスタジオカメラ「UHK-X750」、4K HDポータブルカメラ「UHK-X700」、4K HD超高感度マルチパーパスカメラ「UHL-F4000」、4K HDマルチパーパスカメラ「UHL-43」などをブースに並べて熱心な売込みを行った。

「Live x 8K」をテーマに掲げたアストロデザインは、同社の小型ヘッドの8Kカメラシステム「AB-4830/AC-4829」を中核に据え、レンズとカメラ制御、複数カメラ映像の調整など、テーマに沿ったライブワークフローの展示とデモを行った。8K 60p/4K 120pに対応したSDI + HDMIコンバーターや最新機種インターフェイ



写真3 ソニーが出展した「VENICE2 8K」は、栄えある「NAB Show Product of the Year 2022」シネマカメラ部門賞に輝いた。(出典: sony.jp)



写真4 キヤノンのミラーレスシネマカメラ「EOS R5 C」も「NAB Show Product of the Year 2022」シネマカメラ部門賞を受賞した。(出典: canon.jp)

スアダプター「IA-1566」も注目を集めたという。

リーダー電子は、同社が専門とする波形モニター「LV5600」、ラスタライザー「LV7600」、シンクジェネレーター「LT4610」、IPパケット監視装置「LVB440」を出展して売込みに余念がなかった。(なお、ソニー、池上通信機、アストロデザインの出展内容の詳細については、本誌5月号でレポートされているので参照願いたい)

最後になったが、2022年初めにNABの会長兼CEOに就任したばかりのカーティス・レジェット(Curtis LeGeyt)氏が、今回恒例の年次報告に登壇した。4月25日に行われたこの報告でレジェットCEOは、ローカル放送局の奮闘ぶりを大いに称え「ストーリーミングやモバイルビデオなどの新しいネットメディアが浮上しているが、コミュニティの一員としてコミュニティが求める情報を無料で提供するローカルメディアと地域ジャーナリズムの重要性が再認識されなければならない」と強調した。この主張は、ゴードン・スミス前CEOの路線を踏襲したものと言える。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディア・ジャーナリスト



Shine on.

The all-new diamond.

最先端 & IP ネイティブのモジュール型ミキシングコンソール



diamond video



PDF brochure